

貝坂倶楽部

—季刊 2014 春号 通巻第 28 号—



樋口一葉にゆかりのある平河町一丁目。
江戸名所図会には「この地は昔から甲州
街道にしてその路傍にありし一里塚を土人、
甲斐塚とよびならわせしとなり」とある。貝
塚であったのが現在定説となっている。



発行 NPO つくしくらぶ

目次

寄稿者一行紹介

ラ・ペルーズ海峡とサハリン	藤原 英郎	3
習志野俘虜収容所―戦争がもたらした福音の音楽―	高橋 育郎	5
ハヤブサは還ってきた	高松 良晴	7
大丈夫か？ 機械化社会	田村 徹	10
転載：奇跡の出会い、命の使い方	水谷 謹人	12
見える、観える、MIERU	高松 泰代	14
TEA TIME: Facebook		16
列車遅延	渡辺 成典	18
朋江・きえ・加世	関 敦	20
油断大敵	石川 寛	23
俳句さがし	藤原 昌子	26
サウディアラビア訪問記（2）	藤井 能成	28
村岡花子と東洋英和の教育	湯沢 雍彦	32

寄稿者一行紹介

藤原 英郎	銀行員、現役時代に英国、スイスに勤務
高橋 育郎	国鉄マン、日本童謡協会会員、日本橋「心のふるさとを歌う会」代表
高松 良晴	国鉄マン、鉄道建設改良工事に従事
田村 徹	研究員→国連環境計画局→大学教授→環境コンサルタント
水谷 謹人	みやざき中央新聞
高松 泰代	NPO つくしくらぶ 理事長
渡辺 成典	民生委員
関 敦	非鉄金属メーカー機械技術者
石川 寛	メーカー勤務、仙台在住
藤原 昌子	NPOつくしくらぶ 副理事長
藤井 能成	化学系技術者、分離膜研究開発に従事
湯沢 雍彦	お茶の水女子大学名誉教授

－出てみてわかった世界－

ラ・ペルーズ海峡とサハリン

藤原 英郎

以前つくしくらぶの季刊誌に「宗谷海峡がない」(2010年夏号、通番13号)と書き、同じテーマで同くらぶの講演会を行ったもののいわば続編である。その原稿および講演会の概要は次のようなものであった。――海図はわが国では海上保安庁が作成している。海図にはさまざまな名称の海、たとえば「日本海」などの名称や、各種の海峡の名前、たとえば「津軽海峡」や「宗谷海峡」が記載されている。しかし海図は国際性の高いものであり、各国が加盟しているロンドンにある国際水路機関が英文で定めている。これによれば、日本海はSea of Japan、津軽海峡はTsugaruと記されているが、本邦最北端の北海道宗谷岬とサハリン(樺太)の間にある宗谷海峡はなく、La Perouse Straitと記されている。国際的にはこれが正式名称であり、宗谷海峡はわが国だけの呼称である。これは、200年以上前にフランスのラ・ペルーズ探検隊2隻がこの海峡を西欧船としては初めて横断したので命名したものである。――

今まで北海道には何度も行っていたが、札幌や小樽などまでで、まだラ・ペルーズ海峡は見たことがなかった。その機会がついにやってきた。昨夏7月のことであるが、日本の旅客船でサハリン最大の都市であるユジノサハリンスク(サハリンは州であり、その州都。樺太時代は豊原と呼ばれた)を訪ね、帰路には稚内港に停泊するというツアーがあったのだ。宗谷岬は稚内からそれほど離れてはおらず、岬の丘の上にはラ・ペルーズ探検隊の顕彰碑がフランス海軍により建設されていることは知っていた。同海峡を往復でき、しかも顕彰碑まで見ることができそうなので、参加することにした。

サハリンは、北方四島とは異なり、外国である。ユジノサハリンスクにはわが外務省の領事館もある。またその近くの空港は札幌や成田への定期便もある。横浜港を出航後、函館に寄港し、次にサハリン訪問となった。賑やかな地元観光協会によるイカ踊りに送られて函館を出航後、出入国管理官が乗船してきて、船内の一室で面接が行われた。面接は空港と同じであった。予定通り夜中に海峡を通過し、翌朝にはコルサコフ(戦前の大泊)港外に到着した。岸壁には数隻の貨物船が接岸していたが、大型旅客船が接岸できる設備はない。そこで旅客船に搭載しているモーターボートが活躍する。岸壁に到着すると、そこにロシア側の出入国管理官2人が待ち構えており、簡単な審査が行われた。岸壁には何台かのバスがあり、それに分乗した。説明役はサハリン大学の日本語科の学生であった。州都までは約1時間、道路は舗装はされていた。途中は草原が多く、州都が近くなると3、4階建てのマンションが

多くなったが、その大半は軍人のためのアパートとのことだった。

州都ユジノサハリンスクはサハリン州の南の町という意味であるが、道路は広く、直線であり、かつて日本の作った町という面影はまったくない。停車箇所は3箇所のみであり、後は走るだけである。最初はホテルであり。休憩も兼ねていた。近代的なホテルであり、2階で紅茶が無料で供された。ここでは土産物が販売されていたが、代金は日本の千円札のみ、つり銭なしのことだった。次はレーニン広場で停車した。ここは鉄道の駅の真ん前であり、巨大なレーニン像が北を向いて建てられている。3ヶ所目の停車箇所は州立郷土史博物館の横であった。この建物だけが樺太時代の建物であり、改装されてはいるが、そのまま残っている。前庭を散歩しただけであり、時間がなく中へは入らなかった。前庭には旧日本軍の兵器などが展示されていた。週末であったせいか、結婚式の出席者が多かった。リボンや花で飾られた細長いキャデラック車も何台か目にした。結婚式の多くは軍人の様子であった。州都には数時間滞在しただけで、そのままバスでコルサコフまで戻った。岸壁にはロシア側の出入国管理官が2人待っており、出国の手続きを取り、船からのモーターボートに乗り、本船に戻った。船内に日本製の世界地図があったのだが、サハリンの所を見ると、北緯50度の所に線が引かれ、その南は空白となっている。これは正しい表示であり、ロシアとの平和条約が調印されるまでは、外国とはいえ、帰属不明とするのが日本の立場である。

ラ・ペルーズ海峡を横断し、船は稚内港に停泊した。翌朝、宗谷岬までタクシーを利用することにした。タクシーは本船が停泊していた岸壁に数台待っていた。東方の宗谷岬まで約1時間。岬の先端には「北海道最北端の地」と題する大きな石碑があり、記念写真の格好の場所とされている。背後に小高い丘があり、駐車場もあるとのことで、タクシーに登ってもらう。晴れていればサハリンが見えるとのことだったが、その日は晴れてはいたものの、サハリンは見えなかった。しかしラ・ペルーズ海峡は目の前にととうと広がっている。その丘の先端に近い左端にラ・ペルーズ探検隊の顕彰碑があった。2009年10月にフランスの軍艦「ヴァンデミエール」がここを訪れ、軍楽隊とともに顕彰碑の除幕式を行った。顕彰碑そのものは2枚の帆に見立てた大きな石とともに、ラ・ペルーズの肖像も彫り込まれた立派なものであった。近くには、旧海軍の望楼などをはじめとして、多くの記念碑があったが、ひときわ高いのが折り鶴の形をした「祈りの塔」であり、1983年9月に発生した大韓航空機のサハリン近くでの墜落事件の慰霊碑である。宗谷岬の背後は広い牧場になっており、稚内市の西隣にあるノシャップ岬を経て本船に戻った。

習志野俘虜収容所 一戦争がもたらした福音の音楽一

心のふるさとを歌う会

高橋 育郎

いまから99年前に習志野の原野にオーケストラが鳴り響いた。

そこは習志野のドイツ俘虜収容所である。ここにはバラックの野外ステージが設けられ、ヨハン・シュトラウスの「美しき青きドナウ」などウイナ・ワルツやモーツァルトの「魔笛」、ベートーヴェンの「ヴァイオリン協奏曲」、シューベルトの「未完成」などの名曲がドイツへの望郷の想いを乗せて、40人ほどの楽員が演奏していた。近隣近在から村民が集まって、その音色に耳を傾けたのだ。

また、劇団もできてイブセンに挑戦し、映写幕を張って映画の上映までもして、村民はドイツの文化に親しく触れたのである。

ほかにも交流の輪は広がって、サッカー、テニス、ホッケー、ドイツ体操「トウルネン」、棒高跳び、更には人間ピラミッドの妙技までもが繰り広げられて、周辺の主婦は洗濯を手伝ってはハムやマヨネーズの製法をならい、子供たちは音楽会や演芸会をのぞいては、おみやげに「ラムネ」をもらい、ポトルシップの作り方を教えてもらって、異文化に触れて楽しんだ。

更にはソーセージの製法が本格的に伝えられて、この地から全国的に広まったのである。たまたま千葉市に農商務省畜産試験所ができて、ここの技士が製法を習い農商務省が講習会を催して全国の食肉加工業者に伝わっていったのだ。

この製法を習うためには初代所長、西郷寅太郎大佐の熱心な懇願が功を奏したたといわれている。

この西郷は、西郷隆盛の嫡子であって、隆盛の高潔な人格に明治天皇は心動かし、その思召しで寅太郎はドイツ士官学校に留学したのだ。その体験がドイツに深い理解を持ち、西南戦争の悲劇を、身をもって知ったことで、ドイツ兵俘虜への温情を高めたのである。

その温情ある待遇に応じて収容されている約1000名のドイツの将兵たちは、無為に過ごすことをやめて、自国の文化を伝えようと意気投合して、熱心な文化活動に取り組んだ。とかく単調に成りがちな捕虜生活に潤いと彩りをもたせ、それが地域住民との和に繋がっていったのだ。逆に彼らは日本文化や風習、情緒などにも関心をいただき、漁師や農民の生活を絵に描き、民話をも採取した。稲毛海岸や成田山などの観光遠足にも出かけた。

なお、習志野の地名は明治天皇の御下命によるものであった。

大正3年(1914)第一次世界大戦は欧州を中心に始まったので、当初、日本は直接の関わりがなかったのであるが、中国山東省のドイツ租借地・青島が戦場の舞台になって、このため日英同盟で結ばれた日本は、英、仏、露などの連合国側に立って日独戦争やむなしのかたちで

青島の独軍と戦うことになったのだ。同年11月、独軍は陥落、5000名のドイツ将兵

は捕虜となって日本に送られ、久留米、福岡、大分、板東、静岡など12の収容所に収容され、習志野は翌4年9月のことであった。周知の通り板東は「第九」の演奏で有名である。

習志野の捕虜生活は4年半に及ぶものであったが、ここに大正7年秋、世界中で大流行したスペイン風邪は将兵25名の命を奪い、西郷所長までもが落命したのだ。この年11月に大戦は終結したが、スペイン風邪は猛威をふるっていた。大正8年の正月元旦、西郷所長は朝から高熱で苦しみ医師からは外出を止められたにも関わらず、年頭の挨拶のため馬で収容所に向かい、ドイツ兵に帰国の年であることを告げ、励ましたのであるが、無理が祟って、この日の16時に息を引き取った。葬儀は25名のドイツ将兵と共に行われ、習志野霊園にいまも祀られ、西郷所長の墓碑銘には敬慕の念が刻まれている。

大正8年は帰国の年。ヴェルサイユ講和条約が発効し、クリスマスの朝、ドイツ将兵は収容所を出て津田沼駅(JR 総武線)まで行進し、帰還船の待つ神戸、横浜に向かった。ワルデック総督は、部下のすべてが解放されるまで、最後の一人となって大正9年に習志野を後にしたのである。

毎年11月には、この地に駐日ドイツ武官を迎えて慰霊祭を行っている。

また、近くの小さな公園は「オーケストラ発祥の地」の記念碑が建っている。

さて、私に関わる話しになって恐縮だが、一昨年春には交流を始めたドイツ・カールスルーエ独日協会合唱団の指揮者とピアノの方を、この記念碑に案内した。

習志野は「音楽の街」である。津田沼駅南口前には習志野文化ホールが建ち、このステージには、大パイプオルガンがあり、指揮者はオルガン奏者でもあるところから、ここを見学の際、バッハのオルガン曲の一部を演奏してもらった。当市は本年、市制60周年に当たり記念行事には当合唱団を招聘したい夢を持っている。昨年の夏には私が主宰している歌の会の会場である人形町の日本橋社会教育会館に招いて交歓音楽祭を開催した。この会館は日本橋小学校に併設されているが、この地はもと西郷隆盛の住居跡である。

オーケストラ発祥の地の記念碑のあるところは、当時は千葉郡幕張町であって、私はこの幕張町に住まいを持つ。

さて、オーケストラといえば山田耕筰は大正3年にドイツ留学から帰国。帝国劇場で自作の演奏会を行った。日本最初の交響曲「かちどきと平和」だった。当時、オーケストラはまだ本格的なものではなかったのであるが、その山田は幕張小学校に入学している。通学路には、「からたちの花」が咲いていたそうだ。 (おわり)

2014, 2, 22記す

ハヤブサは選ってきた

高松 良晴

将来予測とは、10年先、30年先、50年先、100年先と、先が長くなればなるほど難しい。それは、過去・現在の実績を未知の遠い未来に投影したものを読み取る作業だからである。

ある碩学が、「好奇心とイノベーション」との表題で、「科学はサイエンスの訳であり、その元々の意味はラテン語の Scientia(知ること、知識)による。何故 星は光っているのか、何故 光は真直ぐなのか、物質はどうしてできるのか、等々のこれらの“何故”の答えを見つけようとするのである。知りたいということから新しい発見がなされ、その発見で得られた知識が社会に蓄積され、人類共通の資産・学問・文化の土壌として引き継がれて行く。」と述べておられる。

ヘルツが電波を発見したとき、何に使うのか、と問われても答えようがなかった、とのこと。だが、130年後の今、インターネットの情報化社会がある。サイエンスがイノベーションに結びつくには何10年もの歳月がかかる。そして、その時になって、それまでの社会では思いも及ばなかった世界が展開されることになる。

今から100年前といえば、1910年代、大正の初め、関東大震災の前、東京駅開業の頃だ。路面電車が走っていた。その路面電車が地下鉄に代わり、東京駅を囲んで超高層ビルが林立する現在の姿を、当時、一体誰が想像しただろうか。50年前でも、1960年代、昭和35～45年頃、東京駅丸の内北口、私が通っていた国鉄本社ビル各階では、和文タイピストが活字を一つ一つ拾いながら公式書類を作成していた。各人がノートパソコンを開き、インターネットで情報検索し会議資料等を作成し、手元のプリンターで印刷しているオフィス内の姿は、当時の私には全く思いもつかないことであった。

人口問題研究所は、日本の総人口の将来推計値を、100年先の試算値を含めて公表している。その将来推計人口の基本的性質と見方として、「社会経済は人間が変えて行くものであるから、我々の今後の行動しだいで無数の展開の可能性を持っており、現在において定まった未来というものには存在せず、推定すべき真の値はわからないのでなく、まだ、存在しないのである。したがって、一般には社会科学における科学的予測とは、結果として将来を言い当てることに役割があるのでなく、科学的妥当性のある前提の下に、今後何が起こり得るかを示すことを目的としている」としている。

将来人口の推計値は、将来の出生率をどう見るかで大きく異なる。出生率とは、一人の女性が生涯子供を産む平均値であり、概ね2.1であればその国の人口は維持されるとされている。

人口問題研究所は、我が国の出生率の実績値が1975年以降から2010年まで2.13

から 1.35 までに減少していることから、将来出生率(中位推計)を、2024 年に 1.33 まで落ち込み底を打った後、やや上昇し、2060 年には 1.35 となり、以降は 1.35 のままの値で推移するという仮定を設定した。その推計結果が、「100 年後に日本の総人口が 3 分の 1 になる」である。

民間大企業の現職役員の方々から、「2~3 年先の経済状況ですら分からない今の時代に、10 数年先の計画って、何の意味があるのですか」と言われたことがある。100 年先のことを、今、議論することは無理なのかな、との思いがよぎる。だが、今が人口増加期から長期減少期への歴史の転換点、将来起こり得る事態を見通したい。同時に、東京の街の今の賑わいを 100 年先まで続くようにせねば、とも思う。

国連は、世界各国の出生率が 2100 年に人口置換水準(概ね 2.1)に収斂するものと仮定して、世界各国の将来人口のシュミレーションを行っている。

2100 年での日本の総人口は、人口問題研究所の推計値(中位)は 4,959 万人だが、国連の推計値は 8,447 万人である。これは、日本の出生率を 2.1 に戻せば、2100 年で 8,400 万人程度の総人口が維持されることを示している。

欧米先進国の多くは、日本同様、長期人口減少傾向にある。しかしその中で、フランスとアメリカは、人口増加傾向にある。

フランスは、1994 年には出生率 1.65%まで低下したが、巨額の公費を投入した育児政策の成果で、出生率が 2005 年 1.94、2006 年には 2.0 と V 字回復を果たした。国連の将来人口予測でも、フランスの総人口は 2013 年 6,400 万人から、2100 年 7,900 万人へと増加となっている。

アメリカは、高い出生率(2005~10 年 2.41%)と移民の増加により、国連の将来人口予測でも、2013 年 3 億 2,000 万人から、2100 年 4 億 6,200 万人へと増加である。アメリカでは、8 秒に 1 人が生まれ、12 秒に 1 人が死亡、36 秒に 1 人移民が加わる、と言われる。だが、1967 年の総人口 2 億人到達時、総人口の 5%であった移民(外国生まれのアメリカ人)は、12%に増加し、2030 年には 20%を超えそうであり、社会不安の高まりの懸念もある。

数は力、数は活力の源、日本の総人口も、現在(2010 年)1 億 2,700 万人から、なんとか移民なしで対応できないものか、と思う。

国家百年の計、これまでは、人口増加に対応しての社会インフラ整備の時代であった。しかし、これからは、人口減少に対応する生活環境整備の時代となる。

思い返してみれば、何故 星が光っているのか、との好奇心からの知識取得、次に、その知識を活用しての、こうありたい世界の実現を目指しての行動の積み重ねが、予想もなかった新しい時代の姿を実現させて来た、と言える。

全く未知の宇宙空間の遠くに飛び立った人口衛星ハヤブサは、数年後、無事、地球に

還り、国中に歓声が上がった。衛星が還って来ることが出来たのは、衛星が突き進む宇宙空間が、たまたま予期されない要因によって環境変化が生じておらず、これまでのケプラーの法則等の物理学・数学だけで説明できる世界だったからだ。

出生率もハヤブサのように戻ってきて欲しいと思う。だが、出生率の場合は、ハヤブサの動きの場合とは、その背景が全く異なる。

人間の営みは、社会・経済・科学などが絡み合い常に変化している世界にある。当然、過去の実績値もそれらを反映しての値である。

将来予測値は、これまでの傾向を伸ばした場合、将来の起こり得る一つを示したものに過ぎない。将来、そうなるかならないかは、別のことである。だからこそ、可能性がある。

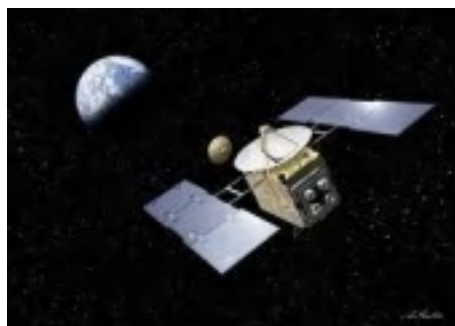
人間の“知りたい”との思いが科学となり、“こうありたい”との思いがイノベーションを生み出してきた。同様に、我々の“人口減少は何故”との思いが科学となり、“活気ある生活・街並みが何時までも”の思いが、新しい世界を創り出して行くのではないであろうか。

実績値を将来に投影する将来予測だけでは分からね世界である。

人間の“こうありたい”との思いが将来を創り出して行く。

現に、100 年前、50 年前、誰も想像もし得なかった東京の街が目の前にある。東海道新幹線東京駅に、「国民の叡智がこれを築いた」との銘板がある。出生率回復もそうあって欲しい。

(平成 26 年 3 月 29 日記)



大丈夫か？機械化社会

田村徹

オリンピックですっかり有名になった「おもてなし」は人間の顔を見ながら、対面でサービスを提供して、接待する方の細かい心遣いを感じ取れるのが基本であると僕は考えています。

しかし、身の周りを見渡すと、対面販売、対面サービスが減ってきて、自動販売機が幅を利かせています。

勿論、工場で電子部品の組み立て、自動車の塗装工場などの単純作業はロボットが活躍していくのはとても良いことだと考えます。町に出ようとして、バス、電車に乗るには、自動券売機で切符を買い自動改札を通らなければなりません、何かトラブルが発生しても係員がそばにいないことが多く、わざわざインターホンで呼び出さなければならず、予定した電車が目の前に来ているのに、イライラすることが有ります。

これは僕が実際に体験したことです、自動改札は無事通過したのに、降車駅でゲートが開かず、駅員詰所に連絡して原因調査をしてもらったところ、乗車駅の記録が不確実で切符に残っていなかったため、乗車区間不明が原因でした。同じようなことが今まで二度も体験しています。自動改札システムは人件費を節約してコスト削減に貢献しているとは思いますが、せめてラッシュ時には駅員が近くに居て即座に機械の不具合などにその場で対応できる体制が必要であると考えます。

僕が最も被害金額の大きかったのは、すでに先回のこの欄で書きましたが伊丹空港から関西空港に向かうリムジンバスで、自動販売機に一万円札を投入しましたが切符はおろか返金もされなかったことが有ります。その時は国際線に乗るため時間的に余裕がなかったので、この不具合の調査をクレームして2週間後の帰国時に正式な調査結果の回答を得ることを確約して乗機しました。帰国後に連絡したところ、当方の発行切符枚数と投入金額はぴったり合っていますので返金しませんとの回答で結局一万円は戻ってきませんでした。この時、では、その機械の売上げ高がいくらで何枚発券したのか調査結果を開示して欲しいと要求しましたが、「それは企業秘密で開示できない」の一点張り、結局は泣き寝入り。

こんな不条理なことは二度と起こって欲しくないものです。そこで一つの提案ですが、ビデオカメラを設置して金銭の投入を確認する購入者側を保護するシステムを自販機には義務づけて、機械化社会のミスを防ぐことも必要ではないでしょうか。

すっかり自動化に不信感を持ってしまったときに、まとまった現金を自分の取引銀行から先方の指定銀行に振り込むことになりましたが、その時、かなりの振込手数料金を払わせられました。

あまり銀行には行ったことがなかった僕にはなんで100万円以上の預金をしてやっとゲットできるような振込手数料金を平気で取るのか不思議でなりません。

それなら、各種振込用紙にあれこれ記入する手間と時間が有れば、コンピュータ端

末で「自分でやるがな」と思ってしまいました。

街を歩けば、至る所に飲料水の自動販売機が林立して美観を損ねています。一台の電気消費量は平均的な一軒家の電気使用料に匹敵すると言われていて、こんなに町を歩く人は喉が渇くのかと不思議に思ってしまいます。深夜に自販機から発するガチャンと言う飲料缶が落ちる騒音も迷惑千万です。自動販売機には環境税をかけて、台数を減らすことも考える時期に来ているのではないのでしょうか。

僕は余り医者に掛かったことはないのですが、ある日診察を受けることになり、問診が始まり、白衣の医師と向き合っ、症状を説明したのですが、医師は僕の顔を一瞬見ただけで、コンピュータにきぎ付け、後は、受付で薬を二種類出すからと言う一言だけ、会話をしたのは受付嬢と服用時の各種注意事項だけ、この様な医院には二度と行きたくないものです。

街歩きをしても、スマホの普及で画面を見ながら下向きに歩く人が急増していますが、小さな画面に夢中になる余り僕の進路を妨害されたりすることもあり大変不愉快です。自転車に乗りながら操作する輩もいて危険な事だと思います。こんなことを何時までも放置して、交通事故が起こった場合一方てきに運転者に責任を負わせるのはまっぴら御免です。

最近、ほっとするのはドライブの途中で道の駅に立ち寄り生産者の顔を見て、生産者の苦労話など聞きながら、野菜、漬物、鉢植えなどを買うことです。流通と分業の発達により、現代は生産者の顔どころか生産地もはっきりしない物を買っている現在人に失われつつあるものを再発見する瞬間でもあります。

こんな風に機械化により失われたもの、消えゆくものにノスタルジーを感じています。とは言え、現在社会で僕が気に入ってるのはコンピュータです。一台のPCが有れば、インターネットでの世界情報の確認、フライト予約、ホテル予約、買い物、CDの購入、顔の見える電話などが自宅のデスクから瞬時にできますので誠に便利です。ネットで購入したものがすぐに自宅に届く魅力、快感は癖になってしまいます。

先日も、オーストラリアに住む友人の自宅周辺をストリートビューを事前にチェックした後、訪問しましたが初めての訪問にも拘わらず、何か見たことが有る風景が広がってきました。

既に、現地を訪ねたことが有るエジプトのピラミッド、ナイル河、アマゾン川、等の風景、空撮も手軽に楽しんでいます。

国内では、オリンピックの招致が決まり、「おもてなし」で国内世論を盛り上げようと関係者は必死ですが、僕にはこの言葉が「面無し」つまり、顔の見えない、見せない社会を作って行こうと聞こえてしまいます。

水谷 謹人

志師塾という勉強会で、チベットから日本にお嫁に来たバイヤーヤンジンさんのお話を聞いた。

チベットは富士山より標高の高いところにある。600万人のチベット人は普通に暮らしているが、日本人が行くとほぼ100%高山病になるらしい。

中国・四川省の都市「成都」からバスに揺られて、順調にいけば丸二日で彼女の生まれた村がある。牛と羊の放牧地帯だ。子ども時代に電気はなかった。

両親は遊牧民で、字が読めない、書けない。家族を育て、家族をたべさせるためにただ一心に生きてきた。ヤンジンさんは11人兄弟の9番目。子供たちは、大きくなった順番に働き手となる。近年は中学校まで通えるようになったが、一番上の兄は小学校に行けなかった。

ヤンジンさんが中学校の頃、歌の才能を見出した先生が高校に進学させるように、親を説得した。村のこどもが高校に行くなんて奇跡に近かった。なにせ高校は300キロも離れたところにあった。

ヤンジンさんの高校進学を応援したのは一番上の兄だった。物心ついたときから働いていた兄が精一杯の現金を準備し、ヤンジンさんの夢を叶えた。

遊牧民はチーズを作っている。それは売るためのもので、家族の口に入ることはない。ただ、カビが生えて売り物にならないものはわずかながら食べられた。ところが時々兄は高校の寮までやってきてヤンジンさんに真っ白なチーズを差し入れてくれた。

そんな兄を思いながら、ヤンジンさんは死にも狂いで勉強した。幸い寮には電気が通っていたので夜も勉強できたが、それでも10時までだった。ただ公衆トイレだけは豆電球が付いていた。消灯後はトイレの中で勉強した。冬はマイナス20度にもなった。穴に板を張っただけのトイレなので夏は悪臭で死にそうだった。

努力の甲斐があり、四川省の音楽大学に合格した。大学で待っていたのはすさまじい民族差別であった。その時のことをおおくは語らなかったが、兄のことを思ったら逃げて村に帰ることはできないと、4年間踏ん張った。

卒業式の日、卒業コンサートで歌い終えたヤンジンさんに「チベット人ですか？」と一人の青年が話かけてきた。

チベット人というだけで4年間、嫌がらせを受けてきた彼女は「はい」と不愛想に返事した。彼は満面の笑顔で「チベットは素晴らしいところですね」と言った。その青年が今の夫・斎藤秀樹さんである。

さて、日本にお嫁に来て、驚くばかりのヤンジンさん。家電製品一つひとつに度肝を抜かれた。このへんの面白い話はいろいろあるのだが、印象に残った話を一つ。

大阪で暮らす夫の両親は彼女を温かく迎えてくれた。生活は豊かでお義母はおしゃれな人だった。

自分の母親とあまりに違いすぎた。ある日「お母さんは日本に生まれて幸せですね。

それに比べてチベットは貧しくて、、」と話した。

いつもは優しいお義母さんの目つきが変わった。バーンとテーブルを叩いて立ち上がり、大声で怒鳴った。「何言うてんの。私だって幸せじゃなかったんやで。日本だって豊かじゃなかったんやで」

お義母さんが自分の人生を語り始めた。戦後満州から命からがら引き揚げてきたという壮絶な話だった。

ヤンジンさんはびっくりした。信じられなかった。そしてチベットよりもっと悲惨な運命を経験した日本がどうしてこんなに発展したのか、不思議に思った。

よくじつお義父さんにきいたら、「教育や」と一言。ヤンジンさん、自分の命の使い方にスイッチが入った。

97年、ヤンジンさんはチベット学校建設推進協会を設立、夫が代表になった。

2年後、ヤンジン第一、第二希望小学校が二校完成。2010年までに九つの小学校と一つの中学校ができた。

来日から19年、すっかり大阪のおばちゃんらしくなったヤンジンさんは、流暢な大阪弁で、今日もチベットに学校建設の支援を呼び掛けている。

(みやざき中央新聞 2014年3月17日号より転載させていただきました。)



見える、観える、MIERU

高松 泰代

そこは不思議な空間だった。日々の天候は様々で、雪の日・雨の日・曇りの日があったはずなのだけれど、はっきりとした思い出のすべての日が晴天。空はいつも青く、見あげると笑顔のお日さまがあった。夕日を見た覚えがない。転校生として中学の三学期通い始めた学校は、お日様の光を反射しているかと思えないように、広く周囲へ光を出していた。校庭の木々も校舎も人間も。今でも覚えている、校舎のすみずみまでも。先生、生徒の姿、表情をはっきりと。自分の人生がくつきりと姿を現してきた。心が解き放されているという思い。途方もない自分の中の変化が一瞬にして始まったのだと思った。

小学校以来すでに4回目の転校経験のおかげで、‘途中から入ってきた外部の人’という自分の立場がどのようなものであるかを十分に知っていた。

すべてが未知の世界では、‘待つ’こと。‘待ち人’に声をかけてくれる‘人の世話をすることができる早く大人になった’同級生が必ずいる。

今思えば素晴らしいコーオーデイナイト力、転校生の個人情報調査し、同級生と学校の情報を的確に伝えてくれる。一時間かかる帰宅まで、転校一日目で二人のクラスメートが一緒だった。何歳も上の女性に見えた。何を話ながら帰ったのかはわからないけれど、きっと私は何もしゃべらなかつたのだらうと思う。通学は名古屋よりも複雑で遠かった。阪急線塚口駅から伊丹線があり、転居先は稲野というのどかな名前の駅だった。北鎌倉を思い出す小さな駅だったけれど、桜の花びらが季節になるとふりそそいだ。クラスメートは二人とも隣の駅だった。

なにもかもが不思議な学校生活が始まった。東雲町という国鉄環状線の駅から坂をかなり上った丘の上にある校舎は、まだ空襲のなごりがあったのだと思うのは、かなり頻繁に先生も生徒も瓦礫を運ぶということをしていた。私には先生たちが先頭にたつて瓦礫を運び、汗を流しているのに驚き又まことにあるべき姿として自然に思えた。今思い出しても、神世の国の長老としか思えない白髪品のよい紳士が院長先生と呼ばれる方だった。眼差しは限りなく暖かく、姿は穏やかでゆったりと、身体すべてから笑みがあふれでていた。授業のことは覚えていないけれど、先生の‘聖書’のクラスになにも矛盾を覚えなかつた。

愛の教えとは‘すべてをそのまま受け入れる’ことだと言われるけれど、不可能に近いからこそ、それが教えになっているのだらうと思う。が、この学校では、先生たちが‘生徒はもちろん自分たちも‘そのままを受け入れる’精神だったのだと後になっても思い嬉しくなる。

思い出す先生たちは、いわゆる‘先生’というタイプとはどこか皆ちがっていて、自主サークルの仲間のような軽やかでリズム感にあふれていた。

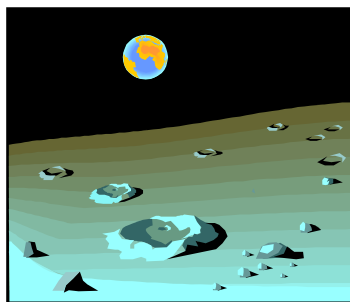
それぞれ専門とする教科のクラスでは、'教える'というよりも'自分が今夢中にいっていることをシェアしよう'というものだった。地理のクラスでは 日本地図、世界地図を何もみないで自分で描けるように(確かに描けるようになりました。)化学のクラスでは 'ご自分が発見した'月の山'について(月のたくさんの噴火口をみながら 宇宙の論理的構造の一端を認識できました)国語の先生は、遠足の前に必ず行く予定の場所についての資料を配り、詩歌、地名を漢字と共に学ぶ。遠足が終わるとその資料の一部をテストになさる。当然白紙答案ということはありません。

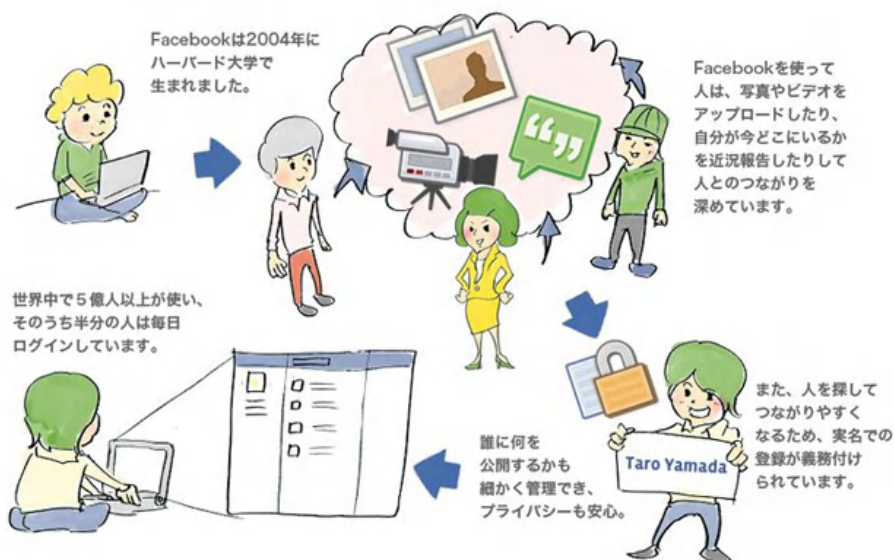
'いかにして生徒に点数をあげるか'を楽しみとしているとしか思えないことが多々あったのを思い出します。逆に言えば'マイナスするようなテストを決して前提としない。'あるとき、漢詩のテストがありました。答案を書いている間に、ある漢詩的なものが浮かびました。用紙の裏に書き留めました。数日後用紙が返ってきたら、自作の漢詩に大きな赤い丸と+20とありました。'プラスを数える学びや'では、生徒がそれぞれ自負を持って青春を多様に過ごせます。成績が良い人がいても、'ああ、あの'勉強だけ'できる人ね' 小さいころからお稽古事をしている生徒も多く、10代半ばにはお師匠さんになっている人たちもいる。多才な才能のあふれる校舎は、'華やか'の一言につきます。そうそう、当時は制服もなく、個性あふれるファッションも華やかさを倍増します。校則? 全く覚えていない。

自主的独自性OKという環境にあれば、五感は全開します。なにがでてくるかわからないクラスを十二分に楽しむために、新学期の前にいただく教科書は春休みの間に自分で読み、問題の答はノートに書いておく。クラスではそのチェックをすればよいだけなので、様々なことをする余裕ができました。もってきた本を読む(ときどき、取り上げられ、クラスが終わると返していただきました)。窓の外の景色を描く、クラスの友人の様子をみる。飛んでいく思い、想いを妨げるようなものが無かったクラスに、高校卒業まで学べたことは、いかにその後の自分の人生には奇跡であり宝物であったかと、今も感動しています。

こうして、KIKUだけで何も見ていなかった名古屋での生活から、世の中がもったいないほど多く見えてくるようになりました。当時両親がどのように過ごしていたか、弟たちが成長とともにどんどん変わっていく様子も観えてきたのです。

目だけでなくMIERU!





歴史

2004年、ザッカーバーグはハーバード大学の学生が交流を図るための「ザ・フェイスブック」というサービスを開始した(本人の登録制)。その数日後、スタンフォード大学やコロンビア大学、イエール大学などの学生からの「同じようなサイトが欲しい」との要望に応え、いわゆるアイビー・リーグの学生にも開放した。その後、徐々に全米の学生に開放され、学生生活に欠かせないツールとなった。大学のメールアドレスを所有する大学生のみに参加が限られていたが、2006年初頭には全米の高校生に開放し、2006年9月までには一般に開放され、有効なメールアドレスさえあれば、世界中の誰もが利用できるようになった。

日本 2008年5月、日本語化されたインターフェイスを公開。これは運営側が翻訳を行った訳ではなく、ボランティア利用者がサードパーティの翻訳アプリケーションを使っての無償作業の成果であった。2010年2月、アメリカ以外では初となる海外法人を日本に設立。代表にはYahoo! JAPAN出身の児玉太郎が就任

「フェイスブック後進国」とも呼ばれていた要因として。

- 日本人と海外との人間関係の数」がそもそも少ないこと、
- グローバルなネットワークというメリットが日本人にとって弱い
- Facebook のアカウントは実名と本人の顔写真、実社会でのプロフィールの登録が義務づけられているが、「それらを誇れる人にとっては有効なのですが、コンプレックスを感じる人にとっては見えない壁を感じる」と指摘している。

登録して始める、楽しむ

—Facebook に登録する、プロフィールの設定をしよう

(実名で写真自己紹介など)

—友達とつながろう —「いいね！」ボタンを押してみよう

利用目的、方法は様々ですが、友人との連絡方法としてはこれまでのメール利用よりも遥かに優れています。

- * これまで友人知人がメールアドレスを変えた場合、繋がりが途切れてしまうことがありました。Facebook では世界中どこにいても、まるで同じ部屋にいるように繋がることができます。友人と'今'を共有できます
- * インターネット環境にいれば、パソコン・スマホ・タブレットでIDとPWを最初に設定すれば、どこでも・いつでも・だれでも一と繋がることができます。
- * 写真、知らせたいこと、記録しておきたいことを共有するだけでなく、自分の記録保存として利用価値があります
- * 世界中のニュースが友人の投稿によって日常に入ってきます。
(英語での発信が多いので、日々英語環境にいることも可能です)

！ 予想できないトラブルを恐れ、発信されたものを見るだけという受け身の姿勢の場合は facebook 利用のメリットは非常に少ないことになります。

列車遅延

渡辺 成典

春の陽射しに背中を押されて衣を脱ぐように、桜の蕾も赤味が目立ってきた。郡山機関区の裏手に流れる逢瀬川の堤防の老木も開花の日が近付いてきたようだ。

この日の乗務は86型で、D51やD60とちがって火床が鰻の寝床のようにひよろ長く、蒸気上りの悪い癖者だった。日に一往復だけ、阿武隈高地のちょうど真ん中にある、小野新町駅までの45.5kmを走る。この86型が嫌われたのは、郡山を出発し次の舞木駅まで定時運転すると、燃え殻の土台がきちっと固まっていない状態で火種と灰が攪乱され、燃焼効率が落ちてしまうからだった。

機関士は運転席に置いたダイヤ札をみて運転する。この時刻表には郡山、舞木、三春などの駅名が、コリ、モギ、ハルなどの略号で記され、その列を右になぞっていくと、区間ごとに異なるタブレット(安全通行手形)の形状(△□○)や区間の運転時分、駅到着、発車時間と進入・進出時の制限速度が記載されている。

ほとんどの機関士は、このダイヤ札に従って定時運転に努める。一方、蒸気機関車はみな素直に動くという前提で設定されているから、86型のような個性の強いタイプはベテラン機関士でも扱いにくいのだ。手に負えなくなって、終着の小野新町駅まで3分程度の遅れが続くことがしばしばあった。

先月、一緒に乗務した機関士は六尺もある大きな体に似合わず神経質な運転をする人だった。案の定、機関車の機嫌を損ねて私も同じ轍を踏んで大失敗してしまった。暴れだした火床は石炭を焚いても黒ずみ、まるで秋の夕陽のように弱々しく燃えるだけで、目が眩む光とはほど遠かった。必要なだけの蒸気が作れず、遅れが増していった。

このやんちゃ坊主の手綱を握る機関士のトラちゃんは、業務の指示に逆らうようなことを言った。「いいか、次の舞木駅まで1分遅れでいくから、気を揉まないでドシンと構えている。ここまでの遅れはきつと取り返せるから。目先だけで追うんじゃなく、全体を見渡してこの癖馬を御するしかない」

逢瀬川の鉄橋を渡って右カーブが終わると、阿武隈川まで直線が続く。ここで無理をするか、それとも先を見据えてじっと我慢するかの分かれ目になる。普段より速度を10キロほど遅くして蒸気の消費量を20%も抑えたことで、火床は万全の状態に固まりつつあった。

日東紡富久山工場付近にさしかかったとき、長い汽笛が鳴り続いた。その時間は10秒程か。周りに何かあったのかと思うほど長く感じた。「今日4月12日は、米軍のB29爆撃機の空襲を受けた日だ。お前は何年生まれだっけ。そうか、昭和20年3月27日生まれでは2週間の赤ん坊だな。この日を覚えておくといい。あの日、俺の友人も犠牲になったんだ。いまの長い汽笛は哀悼の響きなのだ」と言った。

保土ヶ谷化学では勤労働員で働いていた白女、安高、郡商の生徒達26人を含め

て460人が死亡。7月29日には、郡山駅員10人など39人が爆死している。

舞木駅には1分15秒の遅れで着いた。しっかり土台が固まった火床は、スコップで石灰を放り込むごとに白光色に変わり、蒸気圧が上昇していった。三春駅では30秒の遅れに縮め、難所の曲りかねった篠山墜道も一気に走り抜けて、船引駅では定時となった。

沿線の田園では、牛の鼻面の綱を手に泥田を掻き回し、田植えの準備をしている。菅谷駅に着いた時、腰の曲がった老婆が手を振りながら亀のような歩みで線路沿いにやって来た。駅長は困惑の表情で懐中時計に目をやり、機関士の顔を見た。既に2分経過していた。「いいから乗せてやろう。これに乗り遅れると、次の列車まで1時間半もあるのだから」と発車を遅らせた。婆ちゃんは何度も頭をさげながら、デッキの中に消えた。

終着の小野新町駅には、いつものように3分遅れで到着したが、トラちゃんは気にする素振りを見せなかった。年老いた母ちゃんに孝行したような、心地よい風が胸の奥まで吹き渡っていた。
(街こおりやま4月掲載)



朋江・きえ・加世

関 敦

「就活」や「婚活」というのは知っていたが、「涙活」という活動があることを最近知った。映画やスポーツに感動して涙を流すのはストレス解消に効くらしく、それが「涙活」である。玉ねぎを切って涙を流すのは、同じ涙でもストレス解消には役立たない。感動して涙を流すことにより、緊張やストレスに関与する交感神経から、脳がリラックスした状態の副交感神経へ切り替わることによるものとのこと。しかも、テレビを見て一人で



感動して涙を流すより、映画館やスタジアムで大勢の人と感動を共有して流す涙の方が、より効果があるらしい。昨秋の仙台クリネックススタジアム、「楽天」が巨人を破って日本シリーズ優勝、東北の皆さんに溜まったストレスの軽減に役立ったのなら、銀座パレードを待っていた小生もかなり嬉しいし、腹立たしさも半減した。

いつも涙なしには見られない時代劇映画がある。テレビで時々、再放送してくれる山田洋次監督の時代劇三部作、「たそがれ清兵衛(2002年公開)」「隠し剣 鬼の爪(2004年)」「武士の一分(2006年)」である。いずれも原作は藤沢周平の時代小説であり、「たそがれ清兵衛」と「武士の一分」はともに、日本アカデミー賞を総なめにした名作である。特に「たそがれ清兵衛」は米国アカデミー賞の外国語映画賞にノミネートされている。この三作品にはいくつかの共通点がある。いずれも舞台は幕末の東北地方「海坂藩」、これは架空の藩だが、藤沢周平の出身地である山形県の「庄内藩」がモデルと考えられている。庄内藩は会津藩とともに佐幕派として、戊辰戦争を戦い、辛酸をなめた藩である。

三作品の主人公、井口清兵衛(俳優:真田広之)、片桐宗蔵(永瀬正敏)、新乃丞(キムタク)はいずれも下級武士であり、藩内での出世は望めない。しかし、三人は藩内きっての剣の使い手、清兵衛は小太刀、宗蔵は短刀、そして新乃丞は一刀流の名人である。藤沢作品の主人公のそばには、いつも素敵な女性が登場する。三人の主人公には温かく、賢く、そして美しい三人の女性、清兵衛には「朋江」、宗蔵は「きえ」、そして新乃丞には「加世」がいる。朋江を演じたのが宮沢りえ、きえは松たか子、そして加世は檀れいが演じた。

三作品には格別の感激的シーンがある。そのシーンが来るといつも、ティッシュペーパーを用意しなければならない。年とともに涙腺が緩んできたようだ。藩命により藩内随一の剣客との果し合いに勝って帰宅すると、



他家に嫁ぐことになってしまい、待っていないはずの「朋江」が清兵衛を出迎えてくれるシーン。不条理さを感じつつ藩命に従って友を討つことになった宗蔵がそれを命じた理不尽な家老を倒し、そして武士を捨てて生きることを決断、帰郷させた女中の「きえ」を迎えに行くシーン。新たに雇ったという飯炊き女が作った夕食を食べながら、盲目になった新乃丞が、その料理の味は忘れもしない離縁した妻「加世」の味とわかるシーン。山田洋次監督ならではの場面であり、毎回、ティッシュペーパーを消費させられている。

ところで、年とともに涙腺が緩んできたと記したが、人間の身体には、そもそも「涙腺が緩む」といった生理反応や症状はないらしい。「目頭が熱くなる」と同様に、感動の感覚を表す「例えの表現」とのこと、涙腺は涙を作り出す器官であって、涙を溜めておくものではない。老化によって「涙もろくなる」なんぞという生理現象はないのである。逆に涙腺が老化すると、涙の分泌機能が低下してドライアイなどが発症したりする。そうではなく、年とともに涙もろくなるというのは、大脳による価値判断が年令を重ねるために、感情反応に変化が現れる。即ち、経験を積めば誰でも価値観が変わるということなのだろう。

藤沢周平の小説には読むたびに目頭が熱くなる短編もある。新潮文庫の「霜の朝」に収められている「泣く母」である。最後の場面を想像するだけで目が潤む。弟の身代わりとして兄の小四郎が果し合いに望み、相手を倒したものの自分も深手を負って気を失う。気がつくとなかのやわらかい膝の上に抱えあげられていた。幼くして別れた母と再会する以下が、そのラストのシーンである。

「小四郎は黙って目をつむった。いい匂いがした。母の匂いだった」……。

一人で読む小説なのでストレス解消の効果は期待薄だが、有り余るほどの自由時間を手に入れた小生には、貯まるほどのストレスはない。これからもティッシュペーパーの無駄遣いが続きそう。

(2014-3-30 記)

油断大敵

石川 寛

昨年九月に ALS と診断され、この先、身体が自由が利かなくなることが予測できた。今のところは右手以外に不自由なところはないものの、先のことは分からない。自由に動けるうちに、会える人には会いたい、と思った。

十一月の中ごろ、昔馴染みの人たちとの会合が集中した。月曜日に、歯の治療で奥歯を抜いた。その出血がおさまった火曜日に昔の職場の仲間と一杯やった。その翌日の水曜日は三酔会という大学時代の飲兵衛の会合があり、大いに気焰をあげた。

そして木曜日には、昔、海外で一緒だった仲間とのパーティーに参加するため上京した。三時間以上にも及ぶ立食パーティーのあと、新幹線とんぼ返りをし、深夜の仙台に戻った。そして金曜日の昼食会は小学校のクラス会で、二次会までつきあい、延々五時間も遊んでしまった。

このつけはすぐにやってきた。のどに違和感を覚え、咳止めのために市販の風邪薬を飲んだ。飲んだ当初は、楽になるのだが、数日たつとまた違和感が戻る。加齢現象で風邪も治りにくくなったものだ、と思いながらこんなことを二週間以上も繰り返していた。それにしても少し長いと思い、かかりつけの医者に見てもらった。やはり風邪ということで、薬をもらって様子を見たが、よくなるので、再度医者の所に行き、X線写真を撮ってもらおうと、肺炎の疑いがあるといわれ、十二月の初めから約一カ月入院してしまった。

入院した夜、高熱が出て解熱剤を投与され、保冷剤で頭部を冷やされた。あの氷の塊のような保冷剤をタオルでくるんで頭の下に置いてもらった。これが意外と気持ちよく、頭にできたしこりのようなものが消えるようであった。その時は、熱に惑わされて奇妙な夢を見た。その夢は、今思い出してもぞっとする。

夢の中で、私は窃盗犯として女刑事に追われていた。女刑事は言う。この前はうまく逃げられてしまったが、今度は確かな証拠をつかんでいるからね。私の手元にあるいくつかの鍵が窃盗の証拠品になるらしい。鍵をうまく処分しなければならない、と焦っているうちに夢であると気がついた。夢であるとわかってはまだ、窃盗をしたのではないかという不安が持ち上がってくる。不安がすっかり消えたのは、熱が下がってしばらくしてからのことであった。

熱が下がっても体が楽になることはない。点滴と酸素吸入のパイプに繋がれ、ベッドに縛り付けられたかのように同じ姿勢で寝ていた。仰向けに寝ていたので、背中に何か

所も、しこりができたかのような痛みで悩まされた。この痛みが次の夢と現となった。痛いのは現でも、しこりがどこにあるのか皆目わからない。あてずっぽうに背中が痛いと言った看護師に訴え、ところ構わず背中一面に湿布剤を貼ってもらった。これがまたよく効いて痛みが薄れ、妙な夢も現も消えてしまった。手を背中に回せば、貼ってある湿布剤に触れても、しこりの場所を特定はできない。

束縛されることを何よりも嫌う私が否応なしにベッドに縛り付けられてしまった。そして嫌いな注射の親分のような点滴を四六時中注ぎ込まれるのには参った。しかも点滴の場所を三日ごとに移すので、右腕も左腕も針の跡だらけになった。さらに、この針を刺すのが下手な看護師がいるので、これまた苦痛の上塗りになった。私の血管が細いらしく、下手な看護師の中には自分の腕前に見切りをつけ応援を求める者もいた。このときは血管の周りが内出血で腫れてしまい、保冷剤で冷やす羽目になった。

病院で食後のお茶を誤嚥して大ごとになって以来、水が禁じられてしまった。液体にはすべてにとろみをつけることとなった。さらに、食べる物も大口でパクリとすることが危険とされ、小さく切ったものが出るようになった。それは退院後も続き、専門家の言うことに忠実な妻は病院以上に厳しくそれらを守っている。食べる本人にしてみれば、そこまで厳密にしなくてもいいのに、と思うが、今は素直に従っている。その方が平和である。

油断が招いた肺炎騒動であるが、今になって思えば、病院のベッドで苦しんでいた頃は、棺桶に片足を突っ込んでいたのかもしれない。その後の診断結果を見れば、両足とも棺桶の外に出たようで、まずは一安心である。またもや、命拾いをした。

棺桶に片足をいれたくらいで、大騒ぎするのはおかしいかもしれない。昔、静岡の工場で働いていたころは、片足のみならず、全身を入れたこともある。当時は、ドライアイスが貴重で、高価であつたらしい。棺桶にドライアイスを使うより、いつそのこと、冷蔵庫を棺桶にした方がよいと考えた人がいた。静岡の工場では、冷蔵庫を製造していたので、棺桶の冷蔵庫を作れ、という注文が来た。私は、その冷蔵庫の原価計算をするのが仕事であった。棺桶の形の冷蔵庫を作るくらい、わけないことであった。私は原価計算を簡単に終え、開発チームに結果を提出してしまい、棺桶冷蔵庫のことなど忘れてしまった。

しばらくたってから、棺桶冷蔵庫が完成したとの知らせを受けて私も工場内の試作現場に駆けつけた。本物の棺桶と寸部変わらぬ、黒い漆塗りの立派な棺桶があった。そして、勧められるままに棺桶の中に入り、蓋まで閉められた。棺桶の中は真っ暗で、対面用の扉が開かれた時のみ、明るくなる。冷やされる前に出してもらったが、とにかく異様な匂いには参った。匂いのひどさを質問すると、そりゃあ当然だ、開発チームの

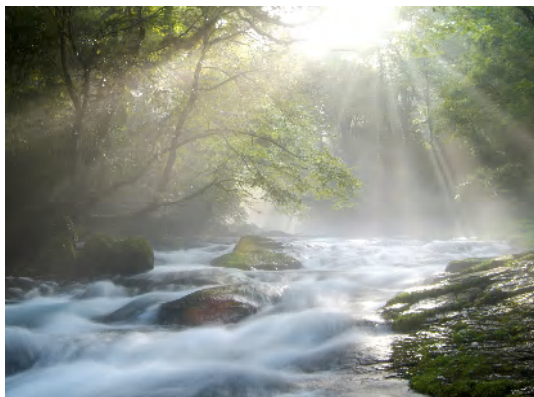
ボスが言う。ボスの話を聞いて驚いた。

棺桶冷蔵庫の難しさは、形ができてからのことであった。試しに死体を入れて冷やしたところ、死体の色が変わってしまった。冬山で遭難して凍傷にかかったような色になってしまう。棺桶の中からの遺族との対面を重んじるので、死体の変色しては困る。死体を変色させないで冷やすことが、困難を極めた。ある大学病院の協力のもとに、数十体の解剖用の死体を使って実験を繰り返した。その努力が実り、変色させずに冷やす方法を会得して、冷蔵庫の完成となった。

私が嗅いだひどい臭いは死体を保存するための薬品の臭いであると教えられた。死ぬ前から死体と同じ臭いが染みついて、しばらく困ったことを思い出した。

油断が招いた入院生活から話が脱線してしまったが、インフルエンザウイルスやノロウイルスが蔓延している昨今、くれぐれも油断召されるな。

(2014-01-29)



俳句さがし

藤原 昌子

NPOつくしぐらぶの活動の一つに文化プログラムというものがある、これは外国のかたからのご要望のあった日本文化を学ぶクラスで、講師の先生がたのボランティア精神に溢れたご協力のもと小さいながら質の高い内容で人気の続いている活動なのである。次の月の予定を確認していただく意味もあって毎月月初めにプログラムの参加者にニュースレターをお送りしているのだが、それだけではつまらないのでスタッフがお役に立ちそうな情報やお勧めの場所などを探してご案内している。また、その月にあう俳句も一句選んで載せている。日本の小学生、中学生なら多分知っていそうな俳句や季節が感じられる句の中から選んでいるがどうしてもイメージが描きやすそうなものになりがちである。

例えば

一月	凧二つ ちらちら雪に あがりけり	村上鬼城
二月	長々と 川一筋や 雪のはら	野沢凡兆
三月	雪とけて 村いっばいの こどもかな	小林一茶
四月	空をゆく ひとかたまりの 花吹雪	高野素十
五月	風吹けば 来るやとなりの こいのぼり	高浜虚子
六月	青がえる おのれもペンキ ぬりたてか	芥川龍之介
七月(八月)	夏草や つわものどもが 夢のあと	松尾芭蕉
九月	名月や うさぎのわたる 諏訪のうみ	与謝蕪村
十月	赤とんぼ つくばに雲も なかりけり	正岡子規
十一月	きつつきや 落ち葉をいそぐ 牧の木々	水原秋桜子
十二月	だんろ燃え おとごは父の 膝の上	松本多佳子

(おとごとは末っ子の意)

なるだけ同じ俳人に偏らないように留意もするが 与謝蕪村の句は絵画的で美しく情感豊かに思われたたびたび選んでは気がついて控えたこともある。画家でもあるからこそかもしれない。

六月の例に挙げた芥川龍之介の句は おのれも の“も”が なぜなのか 釈然としないままだったが彼がフランスの小説家 ジュール・ルナールに心酔していて、そのルナールの著書「博物誌」中の トカゲの項で “青トカゲーペンキ塗り立てご用心”とあるのを踏まえて作った句で本歌取りの手法(換骨奪胎とかもじったとかともいわれている)ということを知り洋の東西を越えての本歌取りにこれまた面白かった。

今年の二月用に選んだ句

“雪のあさ 二の字二の字の げたのあと” (田捨女)

は作者の人生がなかなか興味深い。

本名、田ステ(1634-1698)は丹波国水上郡の小藩柏原(かいばら)藩の藩主前期織田家に仕える代官、庄屋田季繁の娘として生まれた。

父季繁は人徳があったらしい。

3歳の時に母と12歳の時に祖母と死別するが父が利発であったステを大変可愛がったという。小さい時から俳句の才を発揮し、上記の句は彼女が6歳の時に作ったものであるといわれている。長じると父はステを他家に嫁がせるのは惜しいことだと、再婚した妻の連れ子季成との結婚を望んだ。ステは19歳の時彼と結婚する。夫季成も和歌俳諧に秀でた人で共に精進、俳名も高まっていった。ともに京都の北村季吟・胡春らの門下で精進した。芭蕉も季吟のもとにいたのでステの方が11歳年長ではあるが出会っていたかもしれない。

季成は家督を継ぎ代官となり夫婦仲は睦まじく五男一女に恵まれた。しかし、ステが42歳の時季成は51歳で他界する。ステは近くに庵を結び、1000日間の供養をする。その後、子供の成長を見届け七回忌のあと剃髪、仏門に入る。京都に移り俳句、和歌を講じながら(俳句、和歌とは絶縁したとの記述もあるが)仏門の修行の日々を過ごす。しかし、山科の地蔵寺で播州網干の盤珪国師に出会い、54歳の時姫路の龍門寺に転じ盤珪国師に入門する。名を貞閑と改め、龍門寺のそばに庵を建て、のちには不徹庵と名づけられたその庵の庵主となった。徳を慕って来た大勢の尼僧に見守られて66歳の生涯を終えたのである。墓所は龍門寺にある。

1000日間の供養をした庵は千日寺と名付けられたが今はそれもなく代わりにステ女公園となっているそうである。生誕の地柏原町の小学校にはステ女の石像があり彼女の名を冠した俳句のイベントも開催されている。また歴史民俗資料館隣にはステ女の記念館ができ、そこには童姿のステ女像が設置されている。

並び立つ句碑には彼女の別の句

いつかいつか いつかと待ちし けふの月

が刻まれている。

いつかは何時か と五日 をかけていて いつかが3回で“けふの月”は十五夜 満月のこととなる。

子規は捨女を「元禄四俳女」に挙げている。

サウディアラビア訪問記（2）

藤井 能成

PEC 中東事務所は定宿のホテルから徒歩で 10 分位の所にあった。新築の立派なビルの上層階にあり、向かい側に SWCC（Sea Water Conversion Corp.: サウジの海水淡水化事業を取仕切る組織）（写真①）を見下ろし、KACST や Diplomatic Quarter に通ずる高速道路の交差点の角に位置していた②。事務所開設に当って事務所長さんは全て自分一人で手続きを進めたが、2 年もかかってしまったと述べていた。お役人は午前中 2 時間位仕事をすると帰宅して、午後は休んでしまうためだという。さらに電話の契約では、利用してから支払いまでの期間の料金を借りることになるため、ムスリム以外とは契約できないというので、結局サウジの友人の名義をかりて引いたという。中東の国々の諸事情に通暁していても、外国人にはどうにもできないことがある国であるという。



最初のリヤド訪問時、セミナー等の予定の打合せを済ませた午後、日没まで時間があつたので事務所長さんがリヤド西方の砂漠に車を出してくれた。途中、内務省の逆三角形型のビル③が見えたが、地震が無い土地柄のためであろうかりヤドには変わった形のビルがある。



街を出ると道路の左右は岩だらけの荒地である④が、所々にキャンプをする人達の車とテントが見えた。砂漠でテントを張りキャンプするのが楽しみの一つだと聞く。100km/h 超の速度で小 1 時間程度進んだであろうか、長い坂を下り左右に砂地が見渡せる低地に出た所に緑地が広がっていた。地下水を汲み上げ散水機で落花生を耕作している畑であった。砂漠の中の道をさらに進むと途中に検問所があり、銃を持った係官が車を止めて通行の目的などを運転手に聞いた。事務所長さんが手配して入手していた許可証を運転手が示し目的を告げると、何事もなくそのまま通された。さらに暫く走って自動車



道路から脇道に入ると、目的の赤い砂の丘が連なる砂丘地帯が広がっていた。赤い色は酸化鉄の色である。その見渡す限りの砂漠の中の道路を徒歩で行く人影があるのを見て、この夕暮れ時にどこから来てどこに行くのであろうかと不思議に思ったことを思い出す。



所々に生えている植物をトゲに注意して引き抜こうとしてみたが、ビクともしなかった。地中深く根を張り、風に運ばれる砂に埋もれれば茎や枝を砂の上に伸ばして砂漠に生えている植物なので、砂の中は相当の長さなのであろう。



写真⑦は、何回か後のリヤド訪問の際に再び砂漠へドライブした時に撮った、途中の荒地に生えていた樹木である。乾燥や夏の酷暑に耐えて大地に深く根を張って成長したいかにも強そうな姿をしていたのでシャッターを押してみた。この樹木の姿を見ていると、荒々しいが美しいこの自然の中で生きている人々の世界観や宗教観が我々とは随分と異なるものであることが分かるような気がした。



リヤドのホテルの隣にはスポーツ用品店の入るビルがあった。水着やテニス用品、旅行用品など、女性用も含めて、日本と変わらない品揃えのように見えた。隣接して正三角柱の形状をした双子の高層ビル⑧があったが、ここには図書館やプールがあると手に入れたリヤドの案内書に書かれていた。利用できる日は女性と男性の日がそれぞれ曜日で決められているという。このビルと



ホテルとの間には小さなモスクがあり、朝方目を覚ます頃に響いてくる夜明け前の礼拝を告げるアザーンは何とも厳かで、しかし爽やかな気持ちにさせるものであった。これらの建物群は日陰を作る屋根付きの通路で結ばれていた。

最初に訪れた時にはそのスポーツ用品店のあるビルの後ろ隣りにショッピングモールがあった。昼間垣間見たところでは、ホテル側の通路に面したシ

ヨーウィンドウには螺鈿の装飾を施した豪華で日本の家屋には持ち込めそうもない程の大きさのワードローブがいくつも飾られていた。夜になると照明を煌々とつけ、モールの中から人々の笑い声などが外まで聞こえて来るほど賑やかだった。非常に興味をそそられたが、サウディアラビアに来たばかりで中に入って行く勇気が湧かず見ずじまいになってしまった。今思うと残念である。というのは、その年の12月に再び訪れた時にはボヤで一部焼け落ちていて閉鎖されていた。さらにその後訪問した時、跡地には新しいビルの建設工事が始まっていた。工事も日本とはかなり様子が異なっていて、多数の労働者が人力で作業していた。



サウジの人達はパーティー好きのようである。最初のセミナーのあった日の夕方には歓迎パーティーがあり、セミナーの終わった日には日本側から返礼のパーティーが行われた。何度目かのリヤドを立つ日の返礼のパーティーは、空港に行く時間を気にしながら昼のランチの時間に行われたことがあった。



パーティーは、始まるまで広い部屋で歓談しながらかなりの時間を過ごし⑩、時間になると席について双方の代表者が挨拶のスピーチを交わし、その後バイキングスタイルで各々好みの料理を隣の部屋にとりに行き⑪、食事をする⑬。隣の部屋に並べられた料理は、別の部屋の他のお客達もとりに来て、少なくなれば当番の料理人が追加する。



料理は、アメリカンスタイルのホテルで行われたパーティーでも、様々な香料を効かした中東色豊かな日本人の舌にもあう美味なものが多かった。サウジの研究者たちに料理の説明を聞きながら、何度か足をはこびいろいろと味わってみた。サウジの人達は鳩料理を喜んで食していた。



飲み物はアルコール飲料が御法度なのでジュース（かなり甘い）類などである。食後には小さなガラスのカップに注がれたミントの香り豊かな紅茶が出された。アラビ

アコーヒーや紅茶は小さい器に注がれ、何杯もお代わりするのが習慣のようである。食事が終わると一人二人と退席していった。

私が参加した最初の年の1度目と2度目のセミナーは写真⑬の人物の後ろの案内図の、緑の三角形で示される区域にあった施設で行われた。会場は写真⑭に示す階段教室であった。3度目からは完成したばかりの研究所本館⑮で行われ、実験室も見学できた。本館に一步入ると、暑い時期には外に出ることなく寛げるような屋内にも拘わらず植え込みのある、3階吹き抜けの玄関ロビーになっていた。ロビーにはKACST全体の模型や建物の写真が展示されていた。その説明から三角形の緑色の区域はKACSTで働く研究者たちの居住区域で、会場は学校の教室のようであった。本館入り口の前には植え込みがあるが、建物の周りの地面はこぶし大の石が敷き詰められており⑯、建物から離れると一面荒地であった。地図を見ると居住区域だけでも十分に広いが、研究所の敷地は1km²位ある。西隣りはその6倍位の広さのKing Saud Universityであるが望見できなかった。

リヤド市内は、旧市街部を除けば、縦横に約2km間隔で直行する道路網⑰が整備されており、その網目の中に一般の道路が通じている。さらに空港と連絡する高速道路⑱やメッカ、ジェッダ、ダンマンなどの大都市に通じる高速道路が貫通している。車は自動車道から側道に入りビルなどの駐車スペースに進入する。高速道路や自動車道の交差は殆どが立体交差となっていた。



村岡花子と東洋英和の教育

湯沢 雍彦

L.M.モンゴメリー作『赤毛のアン』の訳者として名高い村岡花子は、10年間も在学した東洋英和女学院の教育をもっとも良く身につけ、社会的にも非常に活躍した女性である(1913年高等科卒)。私も非常勤も含め8年間も同校と関係してきた縁があるので、整理してその事情をまとめてみたい。

花子(結婚前は「安中はな」)は、1893(明治 26)年キリスト教信者夫妻の長女として山梨県甲府市に生まれ、2歳の時に甲府メソジスト教会で幼児洗礼を受けた。11歳の明治 37(1904)年に父の一存で公立小学校から東洋英和女学校予科に給費生として編入学した。(授業料免除の代わりに学校の雑務をたくさんしなければならなかった。)

明治 6年の切支丹禁制撤去をきっかけとして、明治初年には女子のためのミッションスクールが日本各地に設けられた。横浜のフェリス女学院を先頭に、神戸英和、同志社女子、立教女子、梅花、山陽英和などが続々と生まれていた。やや遅れて明治 17年に創設された東洋英和は、カナダ東南部に築かれたメソジスト派の宣教師(大部分がトロント、オタワ、モントリオール周辺出身の女性)たちの素晴らしい熱意と母国教派が拠出した多額の財力によって運営された。麻布烏居坂に開かれた最初の入学生は 2名だけだったが、徹底した英国風教育で評価を高めるとともに生徒も増え、土地も増やして、明治 33年には 4階建ての美しい大校舎を建てたことも発展に貢献した。当時の東京でも類の少ない大建築と思われ、世間の注目を浴びた。むろんカナダのメソジスト派の信者たちが毎年多額の援助金を送る熱意があつてこそ出来たことである。

4階建てといっても、教室は 1階のみ、2階・3階は生徒寄宿舍で、通学も認めたが、多くは寄宿してこれが大きな教育効果を上げた。宣教師たちは隣の教師館の個室に住んだ。

教育の方はどうだったのか。はなは自らこう語っている(村岡花子随筆集『昔の先生たち』「東洋英和女学院 120周年記念」ほか)。

「文部省の規則にしばられず、午前は日本語、午後は英語ばかりによる授業だった。英語で世界地理、世界史、修辞学、聖書文学、比較宗教学、リーダー、書取り、作文、会話などで、本当に英学は忙しかった。日本学と英学は独立して採点され、一方が不合格ならば落第であった。勉強勉強ばかりしていた。その他当番制で隣接した西洋人教師館の部屋の片づけをした。ベッドメイキング、掃除の順序、優雅な化粧品と櫛、鏡台のつやふきなど、西洋の習慣や暮らし方についての知識を学んだ。毎朝と毎夕は講堂で礼拝があった。夕べの礼拝は、司会も聖書朗読も祈祷まで生徒によってなされた。寄宿舍生活のきまりは、ミス・ブラックモアが掲げた 60 の文章を暗唱し、一日の行いごとが細やかに記されたことに従うことだった。しつても厳しく、廊下を走れば、監視の下に何往復もさせられたり、「Go to bed」と命じられた。英語とともに、きびしい

宗教教育の毎日だった。はなは 5 年たらずのうちにこれらを身につけ、教師から紹介された近隣名家の家庭教師を 3 件もこなして窮迫した親へ送金している。ほとんど修道院に近い生活だったとも書いている。現在の学生で、これだけ厳しい教育についていける者がいるだろうか。おそらく一人もないのではなかろうか。明治末期の時代なればこそ成り立った話であろう。テレビはもちろん、ラジオ・映画もなく、小説を読むことも禁じられたから、このような勉強が出来たことかもしれない。唯一の息抜きは、鳥居坂の下の餅菓子屋へ行って大きな「金つば」を求め、それを寮生と一緒に食べることだけだった。英米文化の圧倒的優位と未開の日本女性を啓蒙しようとする宣教の熱意が盛上っていた時代でもあった。

教師は、カナダ東南部のプロテスタント・メソジスト派から派遣された日本語を全く解さない婦人宣教師ばかりであった。キリシタン禁制が撤廃されたばかりの日本に 1882 (明治 15) 年以來 10 数名が次々と来校した。いずれも福音を伝えることを人生の使命と感じ、すさまじい熱意に燃え、全身全霊を打ち込んで奉仕に当り、学院の礎を築いていった。

明治初期は全国的に欧化主義の時代に当り、校舎が都心の屋敷町にあったこともあって、伊藤・岩倉・伊達・陸奥など華族の由緒ある家柄の子女が通って名門校の名を高めた。

しかし、英語と宗教中心の教育法は、文部省の明治 32 年訓令に抵触して危機に瀕した。宗教教育を続ければ公認中等学校の特権をはずし、進学も徴兵免除も認めない各種学校にするとのこと。時のブラックモア校長は迷わずキリスト教主義教育の道を選び、資格よりも「人間として実力ある女性を育成する道」をとった。これはすごい信念だった。(もっとも男子部の方は、はっきりと麻布中学を分離し独立させた。無策の明治学院は志願者が減り、廃校の危機に瀕した。)カナダには、これほど統制好きな文部省など無かったのであろう。もっともその頃の日本には、キリスト教を排除して、欧化主義から国粹主義に転ずる時代の流れも大きくあったのである。

『赤毛のアン』の翻訳は戦時中に出来ていたが刊行できず、戦後しばらくしてから訳書が 1952 年に刊行された。それまで日本にはなかった、おしゃべりで想像力豊かで失敗ばかりする少女の成長物語は、昭和 20 年代・30 年代の女性に人気を呼んで、ベストセラーになった。花子は、普通の訳者だったら訪れたであろう原書の舞台プリンス・エドワード島を訪ねることは遂になかった。74 歳のとき娘一家の住むアメリカまで行ったが、翌年には行くといった予定は死去のため果たせなかった。その島は首都オタワからでも 2000 キロも北にあってとても遠い。普通の感覚からいえば、ここはとても寒い世界の僻地なのだが、モンゴメリは「世界で一番美しい所」とよんではばからない。だからアンが文中に描いた「輝く湖水」や「恋人の小径」「歓喜の白路」などは、そのまま残っていることは十分承知していたであろう。100 年以上上ってもそのままの姿を残していることを、昨年訪れた私も確認できて、感嘆する他なかった。大自然の国ならばこそであろう。しかも、同書での言葉や行動は、花子が英和で接した教師たちのそれと全く同じであったから、訳業に苦労は少なかったのである。花子は「アン」の訳書

のあとがきに、「この訳業を麻布の丘の母校(東洋英和女学院のこと)にこもる若き日のおもいでと、今そこに学びつつあるわが心の妹たちにささげます。1952年の春」と記している。



つくくらぶ ―活動の経緯と理念―

我が国は、自国語の日本語によってほぼ全ての日常生活が完結され得る国です。それだけに来日した欧米ビジネスマンの多くにとって、国際都市東京に於いて英語がほとんど役に立たないことは大きな驚きであり、また自らは、“読めない、聞けない、書けない、話せない”の四重苦に陥る現実に愕然とします。日常生活やビジネスのやりとりの中で非常に異なった価値観、いわゆる 異文化の世界の中で途方にくれ、不本意な思いで帰国する事例が多くみられます。その背景には、歴史伝統からの文化慣習の差による 異文化の壁があります。

平成 11 年来、英語でコミュニケーションのできる家庭婦人達が集まり、業務で来日生活する外国人及び家族が遭遇する文化慣習の違いから生ずる諸問題の解決を目的として、「つくくらぶ」の名で支援活動を行ってきました。

“つくくらぶ”の名は、“(人に)尽くす”との意味を込め、同時に、雪解けの春の野に顔を出し“自ら伸びやかに育つ”土筆の姿を思い描いています。

異文化は、なにも国と国との間にだけあるものではありません。同じ国の中にも、個人どうしの中にもあります。文化はどちらが正しく、どちらが悪いというものではありません。それぞれの正しさを主張しあうところに紛争や憎しみが生じがちです。それゆえ、私どもは、お互いが相手との違いを理解し、その違いを尊重し合うことこそが、相互理解を可能にするとの考えで、これまで活動し、これからも活動してまいります。

これらの活動を明確に位置づけるため、内閣府に特定非営利活動法人としての設立申請を行い、平成 18 年 9 月 5 日、その認証(府国生第 859 号)を取得しました。

また、これを機会に、国内外のビジネスや技術開発など、長年業務に携わった経験豊富な方々の知恵や工夫をも活動に生かして行くこととしています。



江口春畝様 (会員)

つくしくらぶ ―活動の経緯と理念―

我が国は、自国語の日本語によってほぼ全ての日常生活が完結され得る国です。それだけに来日した欧米ビジネスマンの多くにとって、国際都市東京に於いて英語がほとんど役に立たないことは大きな驚きであり、また自らは、“読めない、聞けない、書けない、話せない”の四重苦に陥る現実に愕然とします。日常生活やビジネスのやりとりの中で非常に異なった価値観、いわゆる 異文化の世界の中で途方にくれ、不本意な思いで帰国する事例が多くみられます。その背景には、歴史伝統からの文化慣習の差による 異文化の壁があります。

平成 11 年来、英語でコミュニケーションのできる家庭婦人達が集まり、業務で来日生活する外国人及び家族が遭遇する文化慣習の違いから生ずる諸問題の解決を目的として、「つくしくらぶ」の名で支援活動を行ってきました。

“つくしくらぶ”の名は、“(人に)尽くす”との意味を込め、同時に、雪解けの春の野に顔を出し“自ら伸びやかに育つ”土筆の姿を思い描いています。

異文化は、なにも国と国との間にだけあるものではありません。同じ国の中にも、個人どうしの中にもあります。文化はどちらが正しく、どちらが悪いというものではありません。それぞれの正しさを主張しあうところに紛争や憎しみが生じがちです。それゆえ、私どもは、お互いが相手との違いを理解し、その違いを尊重し合うことこそが、相互理解を可能にするとの考えで、これまで活動し、これからも活動してまいります。

これらの活動を明確に位置づけるため、内閣府に特定非営利活動法人としての設立申請を行い、平成 18 年 9 月 5 日、その認証(府国生第 859 号)を取得しました。

また、これを機会に、国内外のビジネスや技術開発など、長年業務に携わった経験豊富な方々の知恵や工夫をも活動に生かして行くこととしています。



江口春畝様 (会員)

平成 26 年 4 月 (第 8 卷 2 号) 貝坂倶楽部

発行所 NPO つくしくらぶ出版

102-0093 東京都千代田区隼町

2-12 藤和半蔵門コープ 801

email tpine304@nifty.com